

令和二年度一般入学試験（Ⅰ期）問題 国語

埼玉医科大学短期大学

注意事項

- 一 解答は別紙答案用紙に書くこと。
- 二 解答を書く前に必ず受験番号・氏名を書くこと。

問題用紙六枚

答案用紙一枚

令和二年度一般入学試験（I期）問題 国語

埼玉医科大学短期大学

注意事項

- 一 解答は別紙答案用紙に書くこと。
- 二 解答を書く前に必ず受験番号・氏名を書くこと。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

山はいい。新芽のころが自分にとっての（ア）だ。北の斜面に雪が残っていたりするが、そこにもフキノトウが顔をのぞかせている。山肌をいろどって、萌え出たばかりのさ緑がまだら模様をえがいている。

初夏の山は忙しい。歩きながら、なじみの花をさがしている。ミヤマダイモンジソウ、アカミノイヌツゲ……山の花は名が難しい。舌を（イ）そうだし、憶えても、すぐに忘れる。

学生のころから登ってきた。三十代は生活に追われて中断した。四十代半ばで再開。日ごろ自己流のトレーニングをしているので、脚には自信がある。岩場にきても腰が（ウ）ない。溪流だって岩づたいに跳んでいける。ヤブに入りこんでも、たいは方向を見きわめて抜け出せる。若いころ身につけた勘というものだ。

たいていはひとり登山なので、ちつとも急がない。一応は（エ）をめざしているが、べつに頂にこだわらない。体調や天気ぐあい、山の大きさ、下山後のこと、いくつかを考え合わせ、ほどのいいところで切りあげる。そこが自分の山頂だと思えばいい。

（A）の山は木の実がおやつ兼気つけ薬である。鳥がありかを教えてくれる。人間の目は（a）怠惰であって、表面しか見えないし、葉っぱに隠されていると、それだけでもうお手上げだが、鳥たちは、はるか上からでも、ちゃんと木の葉の下を見通している。まっしぐらに舞い下りると、枝の先っぽにとまり、首をかしげて（b）思案するしぐさ。つぎにはモゾモゾともぐりこむ。一部（c）シジューを見てとって、（1）あとでそつとお裾分けにあずかるわけだ。

食べごろだつて鳥がコーチをしてくれる。たとえ赤らんだり、大きくふくらんでも、鳥が知らんぷりをしているのは熟していない。ガズズミ、エビヅル、ニワトコ。羽のある友人の姿が見え隠れしだすころ、ためしに口に含んでみると、ちょうどいい実りぐあいだ。たいていはすっぱすぎるか、にがすぎるが、それは人間が甘味づけになっているまでのこと。

ヤマブドウ、アキグミ。調子にのってナナカマドの実を頬ばったとたん、口がひん（オ）た。いまなお舌がそっくり、世にも強烈な味を覚えている。

アカハラ、クロツグミ、カワガラス。イワナ、アマゴ、モリアオガエル、サワガニ、オオサンショウウオ。ひそかに「無口な友人たち」と名付けている。ほんとうは口があつて、仲間同士でおしゃべりし合っているのだろうが、残念ながら人間には聞きとれない。タヌキ、ウサギ、コウモリ、ブツポウソウ。たいていは思いもかけないところで友人たちと出くわした。

ある（B）のこと、木陰で休んでいるとアブがやってきた。カナブンかもしれないが、顔のまわりをブンブン飛びまわる。出迎えともとれるが、自分の領界を侵されて立腹しているようでもある。キャラメルを舐めながらながめていると、やおら目の前を猛スピードで往復しはじめた。短距離選手がダッシュをくり返しているぐあいである。どういう見でそんなことをするのかわからない。飛行力をためしているようでもあるれば、侵入者にわが身の能力を見せつけているようでもある。そのうち気がすんだのかブイといなくなった。

腰を上げたときに気がついたが、（2）足元の黒い石に二つの目玉がついていて、じつとこちらをうかがっている。イボガエルの大きなやつが（d）繁みから這い出ていた。うっかりストックを突き立てるところだった。指先でチョイとつくと、うるさそうに横を向いた。木陰で昼寝をしていたのかもしれない。まことにあいすまぬことをした。

そのあと岩があらわれ、植生が変わり、ササとハイマツになった。とたんにトンボの大群がやってきた。顔にぶつかってくるのもいる。その数は数百、いや数千、おそろしくすばしっこいアキアカネの仲間たちだ。

夜の森は暗い。月夜だと沢が銀紙のように光っている。黒々と盛り上がった樹林の梢のあたりが、銀粉をまいたように白々としている。

焚き火の燃えかすの匂い。夜明けまでまだいぶあるが、どうせもう眠れっこないだろう。倒木に腰をのせて沢音を聞いている。薄い膜のような雲が走っていく。それが月にかかる、こころもち辺りが暗くなる。そんな夜空をながめていると、自分のからだも薄雲のようにフワフワ(e) タダヨっていくようだ。

両手をひろげて、ちよっぴりムササビになったつもり。猛進していくイノシシは、耳元にどんな風を感じているのだろう。あるいは(C) 眠中のヒグマのこと。バクは夢を食うというが、ヒグマは長い長い眠りのなかで夢を見るのかどうか。月が隠れて樹林帯が闇に沈んだ。朝がすぐそこにいる。(3) 話し相手は自分だから、これほど気の合う仲間もない。

(4) 「どうだ。少しは雑念が薄らいだかな」

とたんに人恋しくなるのがフシギである。午前中に山を下るとしよう。家にもどったら調べたり、確かめておきたいあれこれのこと。それから自分に声をかけて立ち上がる。そんなふうにして少しずつ、(5) 無口な友人たちのアルバムができていった。

(池内 紀『森の紳士録』による 一部改変)

問一 傍線部(a) (e)の漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字にせよ。

問二 空欄(A) (C)に入る最も適切と思われるものはどれか。次の中から選んでそれぞれ番号で答えよ。(同じものを繰り返し用いてもよい。)

1 春      2 夏      3 秋      4 冬

問三 空欄(A) (E)に入る最も適切と思われるものはどれか。次の中から選んでそれぞれ番号で答えよ。

1 出発点      2 山頂      3 山開き      4 登山日      5 高山      6 速さ

問四 空欄(I) (ウ) (オ)に入る最も適切と思われるものはどれか。それぞれ次の中から選んで、問題文中で下に続く活用形にして答えよ。

まがる      かむ      きる      ける      ひく

問五 傍線部(1) 「あとでそっとお裾分けにあずかるわけだ」とはどういう様子か。三十字以内で説明せよ。

問六 傍線部(2) 「足元の黒い石」とは何を指しているか。問題文中から抜き出せ。

問七 傍線部(3) 「話し相手は自分だから、これほど気の合う仲間もない」とあるが、そうであることがわかる根拠となる部分を探して、十五字以内で抜き出せ。

問八 傍線部(4)「どうだ。少しは雑念が薄らいだかナ」とあるが、「少しは雑念が薄らいだ」の説明として適していないのはどれか。次の中から一つ選んで記号で答えよ。

ア 夜を森の中で過ごし、黒々と盛り上がった樹林の梢を見上げて高まりつつあった森の不気味さが、月の光の明るさによって少し薄らいだように感じられた。

イ 夜明けまでまだ時間がある中で沢音を聞いていると、フワフワとした雑念が夜空の薄雲が少しずつはがれていくように消えていくと感じられた。

ウ 日が暮れてすべてが闇に包まれた中、朝を迎えるまでの時間に森の中の出来事がいろいろと思いつき出され、自然と一体となった落ち着いた気持ちになれた。

エ 都会の騒がしい日常を離れ、雑念を払うためにやってきた大好きな山の中では、何もかもがすべてを忘れさせてくれると感じられる。

オ 山の中で過ごす短い時間はあっという間に終わり、否応なくすぐさま現実に引き戻されるが、森の中っていると雑念が解消されたように感じられる。

問九 傍線部(5)「無口な友人たちのアルバムができていった」とあるが、「無口な友人たち」とは誰のことか。また、「アルバム」とはどのようなものなのか。それがわかるように、五十字以上六十字以内で傍線部分を説明せよ。(句読点も字数に含める)

問十 問題文の内容や表現の特徴を説明したものととして、適していないものはどれか、次の中から一つ選んで記号で答えよ。

ア 森の中にいる「紳士」とは何者なのか。著者が森の中を歩いて出会った生き物たちが改めて興味深く感じられ、別の世界に引き込んでくれる。

イ 森の生き物たちは、人間よりも「紳士」である。自然を愛する著者が、山歩きの道すがら出会った、さまざまな生き物たちの姿を生き生きと描き出している。

ウ 動植物への愛あふれる優しい眼差しがとても魅力的な表現となっている。人間も自然の生き物。同じ目線で森の生き物たちと良い関係を築いている。

エ 森に生きる生き物たちを次から次へと取り上げ、動物や植物の姿が臨場感にあふれている。森の厳しさや過酷さも表現され、自然を見る目が変わってくる。

オ 森の中での動物や植物との心温まる対話が聞こえてくる。著者の山歩きの体験が反映されていて、素朴で温かさが感じられる文章となっている。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

遠い昔の人々は、(1)「根は、口の働きをしている」と考えた。だったら、葉の役割は何なのだろう。「葉っぱは、何の役に立っているのだろう」というのも、昔の人々を思い悩ませた素朴な疑問である。

この疑問に、(2)「葉っぱは、飾りだ」と答えることはわかりやすかっただろう。意外と、説得力がありそうである。それぞれの植物たちが、形の異なる葉っぱを持っている。マツやモミジ、イチヨウなど、葉っぱにはいろいろな形がある。「葉っぱは、飾りだ」と考えれば、多彩な形があることはうなずける。

植物は、種族ごとに、大きさの異なる葉っぱを持っている。だから、「種族ごとに、からだにふさわしい大きさを工夫して、着飾っているのだ」と説明できる。葉っぱのつき方もさまざまであり、それぞれが美しい。葉っぱは古くなれば枯れ落ち、新し

い飾りが生まれてくる。植物たちは、工夫を（a）凝らして装っているのだろうか。

お洒落な樹木たちもいる。春から夏にかけての緑は、（3）秋に装いを変える。真つ赤に染まるモミジ、黄金色に色づくイチヨウたちだ。サクラも、春に美しい花を咲かせ、そのあとに、新緑の美しさを見せびらかす。花から緑の葉っぱへの衣がえは、春に花咲く樹木たちのお色直しだろう。「葉っぱは、飾りだ」という考えに、ピッタリの現象かもしれない。

季節ごとのお色直しをしない、地味な樹木たちもいる。一年中、緑のままで通すマツやスギたちである。葉っぱの形は、思い切り（b）奇抜だが、色は目立たない。でも、これらも、季節ごとに緑色の深さを変える化粧直しをする。

「植物は、葉っぱで着飾っている」と考えると、（A）も装飾品ということになるだろう。赤いリンゴやサクランボ、ワイン色のブドウ、オレンジ色のビワやミカンなど、形や大きさ、色もそれぞれであり、種族が工夫を凝らした装飾品をつくることになる。

このように考えてみると、「葉っぱは、飾りだ」と、納得できそうである。しかし、「葉っぱは、飾りだ」という考えに、飽き足りない人々もいた。葉っぱを注意深く観察した人たちであった。「葉っぱは、太陽の光が来る方向に向く」ことに気づいた人たちは、「なぜ、葉っぱは太陽の光が来る方向に向くのか」と疑問を抱いたはずである。

「芽が土から出ると、すぐに葉っぱが現れるのはなぜか」と、不思議に思った人もいただろう。「芽生えの葉っぱを切り取ると、芽はまったく成長しない」ことを確かめた人もいたはずである。

これらの人々は、「葉っぱは、単なる飾りでない。植物の成長のために、何か役立っているはずだ」と気づいたに違いない。昔の人々を悩ませた「葉っぱは、いったい何の役に立っているのか」という素朴な疑問を解きかけは、スイスのソシユールの実験であった。彼は、光を当てて、密閉したガラス容器の中で植物を育てた。

その結果、ガラス容器内に存在した気体の二酸化炭素がなくなるにつれて、二酸化炭素の成分である炭素の量が植物のからだの中に増えたのだ。彼は、「二酸化炭素は、植物に吸収され、からだの中にとどまる物質になる」と考えた。

ドイツのザックスは、（4）「吸収された（1）が葉っぱの中で（2）になつてとどまる」ことを発見した。彼がやった実験は、有名である。私たちの小学校、中学校の理科の教科書を見れば、必ず出ているだろう。

夕方、葉っぱの表と裏の一部を、黒い紙で覆った。一昼夜、植物を暗黒において葉っぱの中のデンプンを消費させた後、数時間、葉に太陽の光を当て、その葉を（c）摘み取った。葉を熱湯につけてから、七〇度ぐらいのアルコールの中に（d）ヒタした。葉をアルコールにつけると、葉の緑はアルコールに（e）トけ、白い葉っぱになる。

その葉をヨウ素液につけると、光の当たっていたところは青紫色になる。（B）、光の当たらなかった部分は青紫色に染まらない。ヨウ素液で青紫色に染まるのは、デンプンである。（C）、この実験は、「光の当たった部分にデンプンができ、光の当たらない部分にデンプンができない」ことを示している。

（D）、ザックスは、植物を光に当てる前と当てた後に、葉から一定面積を切り取って、その乾燥重量を比べた。こうすれば、「どれだけのデンプンが葉に蓄積されたか」を推定できる。つくられたデンプンが葉の中に蓄積されることが、この方法で示された。

植物が水を吸うことと、ここで紹介した一連の研究を合わせて、「緑の植物たちが、根から吸った水と、空気中から吸収した二酸化炭素を材料に、光を使って、葉っぱでデンプンをつくる」ことがわかってきた。

デンプンは、植物にとっても、動物にとっても、食糧になる栄養物である。コメやムギ、トウモロコシ、ジャガイモなどの主な成分である。動物がデンプンを食べて消化すれば、ブドウ糖ができる。このブドウ糖は、大切な栄養物である。

私たちは、病気などで食欲がなく栄養物をとれないとき、病院に行くとき点滴注射をされる。その中に、ブドウ糖が入っている。エネルギーを得て体力を維持するためである。この点滴注射を思えば、ブドウ糖が大切な栄養物であることはよくわかる。

結局、植物たちは、自分の食糧を自分でつくっているのだ。葉っぱは、植物たちの飾りではないのだ。「緑の葉っぱが、太陽の光を利用して、ブドウ糖やデンプンを自分でつくる」ことが明らかになったのだ。この反応を（5）「光合成」という。

太陽の光がなければ、この反応はできないので、食糧はつくれない。だから、植物は、日当たりの悪い場所ではよく育たないし、もっと暗ければやがて枯れてしまう。光が不足して植物が枯れるのは、動物が食べ物を得られず餓死するのと同じである。

昔の人々の抱いた「植物は、何を食べて、すくすく育つのだろう」という素朴な疑問は、解かれた。植物たちは、根から吸収した水と空気中の二酸化炭素を材料に、ブドウ糖やデンプンなどを葉っぱでつくり出している。植物は、自分で栄養をつくるのだ。

私たちは、生命活動のためにエネルギーがいる。だから、エネルギーを得るために食べ物を食べる。一方、植物たちは、「自分が生きるために食べ物がいる。だから、食べ物を自分でつくる」という、わかりやすい生き方である。

しかも、食べ物をつくる材料は水と空気中にある二酸化炭素である。いずれもが、自然の中にとつぷりと存在し、きわめて安全な素材である。使うエネルギーは、太陽の光である。いっぱいあるクリーンなエネルギーである。

こうして生きていけば、自然を汚すこともないだろう。自然の中で生きるための、こんなにも美しいしくみが他にあるだろうか。(6) 植物たちの生き方は、私たち人間の生き方とはひと味もふた味も違っている。

(田中 修『ふしぎの植物学』による 一部改変)

問一 傍線部(a)～(e)の漢字は読みをひらがなで答え、カタカナは漢字にせよ。

問二 空欄(A)に入る最も適当な語句を漢字二字で答えよ。

問三 空欄( ) (B・C・Dに入る最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

- ア また
- イ そこで
- ウ しかし
- エ さて
- オ だから

問四 傍線部(1)「根は、口の働きをしている」とあるが、遠い昔の人々が考えた「根が口の働き」をしているとはどういうことか。二十字以上三十字以内で説明せよ。

問五 傍線部(2)「葉っぱは、飾りだ」と答えることがわかりやすかっただろう。そう答えることが意外と説得力がありそうだと思う理由として、ふさわしくないものを次の中から一つ選んで、記号で答えよ。

- ア 葉っぱにはいろいろな形があり、多彩である。
- イ 種族ごとに大きさの異なる葉っぱを持っている。
- ウ 葉っぱは古くなれば枯れ落ち、新しくなる。
- エ お洒落な樹木たちは秋に装いを変える。
- オ 一年中、緑のままですす樹木たちもいる。

問六 傍線部(3)「秋に装いを変える」とは、具体的にどうなることか。漢字二字で答えよ。

問七 傍線部(4)「吸収された(①)が葉っぱの中で(②)になってとどまる」とあるが、空欄①・②に当てはまる

語句の組み合わせとして最も適するものを、次の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ア ①栄養物 ②食糧  
イ ①二酸化炭素 ②酸素  
ウ ①二酸化炭素 ②デンプン  
エ ①水 ②デンプン  
オ ①水 ②食糧

問八 問題文は、その内容から大きく三段落で構成されている。その三段落に分けた場合の第二段落(①)、第三段落(②)に当たると最初の五字ずつをそれぞれ書き出せ。

問九 傍線部(5)「光合成」とあるが、その働きについて、問題文を参照して「水・緑の葉っぱ・太陽の光」を入れて、五十字以上六十字以内で簡潔に説明せよ。(句読点も字数に含む)

問十 傍線部(6)「植物たちの生き方は、私たち人間の生き方とはひと味もふた味も違っている」とあるが、私たち人間の生き方とはひと味もふた味も違っている植物たちの生き方とはどのようなものか。問題文の内容と合致していないものを、次の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ア 植物は、きわめて安全な材料を根や葉の働きによって、大地や空気中から吸収し、植物にとってだけでなく、動物にとっても食糧になる栄養物をつくっている。  
イ 私たちは、生命活動のためにエネルギーがいる。その他者のエネルギーとなる食べ物をつくることを目的としている植物は、格別に味のある存在と言える。  
ウ 私たち人間は、生命維持のために食糧を必要とするが、植物たちは自分が生きるための食べ物を自分でつくるといふ、わかりやすくシンプルな生き方をしている。  
エ 植物は、自然の中にとっぷりと存在する安全な素材と、太陽の光というクリーンなエネルギーで、自然を汚すこともなく美しいしくみで生きている。